

岡崎市読書に関するアンケート調査結果

令和 7 年 3 月
岡 崎 市

1 調査の目的

このアンケート調査は、平成 31 年 4 月に策定した第三次計画の対象期間が令和 7 年度までであることから、当事者である当市の子ども及び、それに関わる保護者の読書に関する実態を把握し、次期計画の基礎資料とするためのものです。

※本報告書における「読書」とは、紙及び電子媒体で本を読むこととし、漫画・雑誌・教科書や参考書は除きます。

2 調査の実施状況

インターネット回答により令和 6 年 11 月に実施

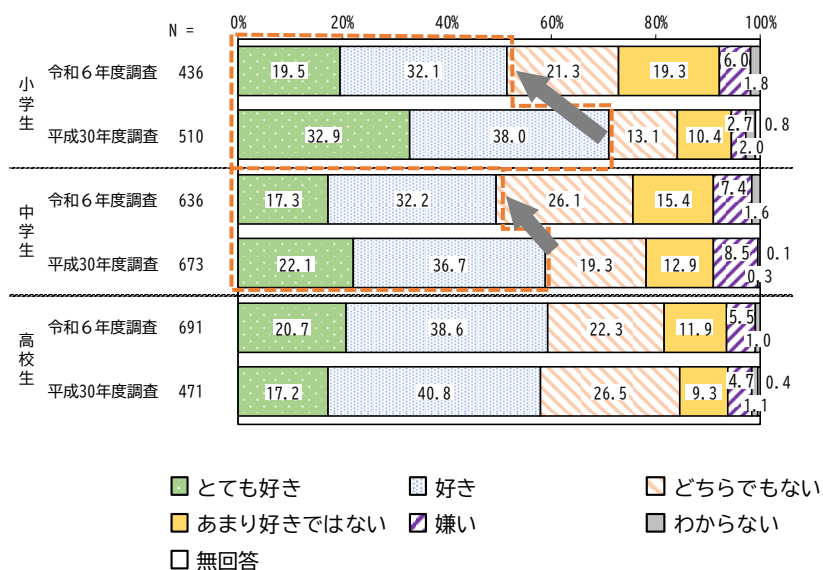
対象	対象人数	有効回答数	有効回答率
園児保護者	781	290 通	37.1%
小学生保護者	794	429 通	54.0%
小学生	536	436 通	81.3%
中学生	738	636 通	86.2%
高校生	1,340	691 通	51.6%

3 調査の主な結果

(1) 小学生・中学生・高校生

① 本を読むことが好きか

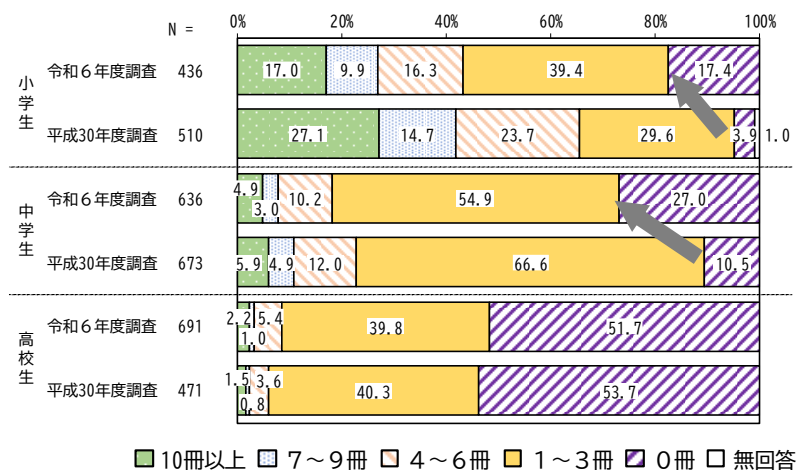
本を読むことが好きについて、小学生では“好き”の割合が51.6%、中学生では49.5%、高校生では59.3%となっており、平成30年度調査と比較すると、小学生、中学生において“好き”の割合が減少しています。



② この1か月に、本を何冊くらい読んだか

この1か月に読んだ本の冊数は、「1～3冊」の割合が小学生（39.4%）、中学生（54.9%）で最も高く、高校生では、「0冊」の割合が51.7%と最も高くなっています。また、「0冊」の割合は、小学生で17.4%、中学生で27.0%となっています。

平成30年度調査と比較すると、「0冊」の割合が小学生（17.4%）、中学生（27.0%）で10ポイント以上上昇し、高校生は大きな変化はみられません。

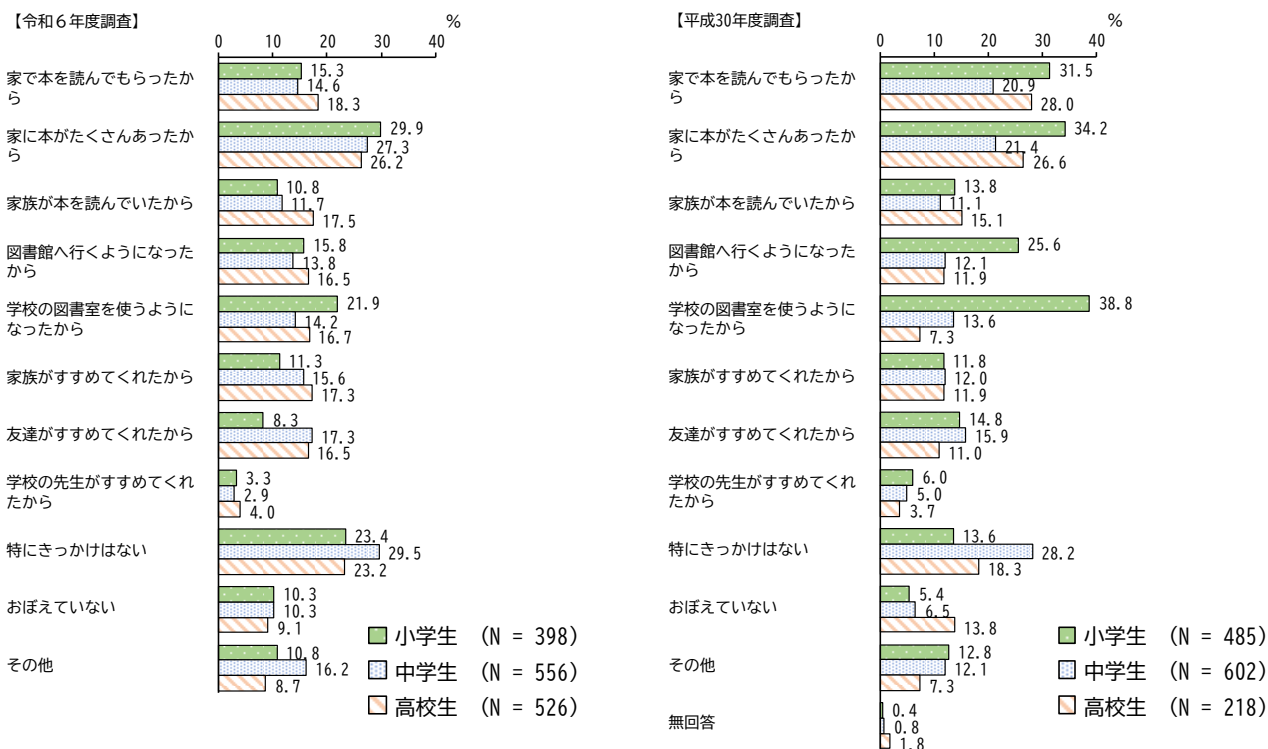


○特に小学生、中学生において、本を読むことが好きの割合が減少、不読率が上昇しています。「第五次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画の概要」（文部科学省令和5年3月28日発表）で指摘されていると同様に、新型コロナウイルスの発生を受け実施された臨時休業等により、学校図書館へのアクセスが一定期間制限されたり、図書館においても、臨時休館や開館時間の短縮、入館人数の制限等を余儀なくされたことなどから、子どもが読書活動をする機会が減少し、“本を読むことが好き”の割合の減少、不読率の上昇につながったことも考えられます。

③ 読書をするようになったきっかけ

読書をするようになったきっかけは、小学生、中学生、高校生すべてで、「家に本がたくさんあったから」の割合が上位となっています。一方、「家で本を読んでもらったから」はすべてで減少しています。また、小学生では、「学校の図書室を使うようになったから」の割合も15ポイント以上減少しています。

○読書のきっかけとして、幼少期に家で本に接する機会が多いことにより読書をするきっかけにつながっている状況もうかがえます。しかし、「家で本を読んでもらったから」は減少しており、幼少期から家庭において、本と触れ合える環境づくりが重要です。



④ 読書が好きかと家族が読書をしている状況の関係

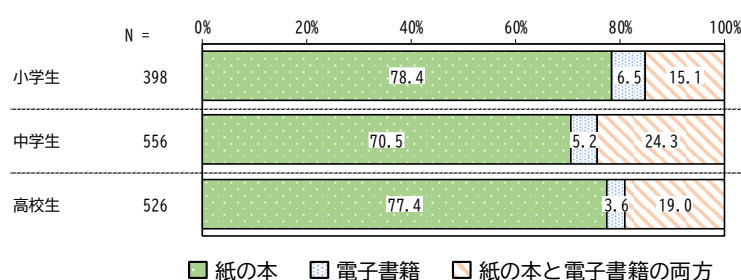
読書は好きか別に家族が本を読んでいる頻度をみると、各学年で本を好きな子どもほど、その家族も「よく本を読んでいる」「時々本を読んでいる」を合わせた割合が高くなっています。

○本を好きな子どもの家庭では、その家族も本を読んでおり、「家読」など家庭における読書活動を推進することが重要です。

学年	読書が好きか	家族が本を読んでいる割合 (よく本を読んでいる、 時々本を読んでいる)
小学生	読書がとても好き	70.5%
	好き	61.4%
	あまり好きではない	42.8%
	嫌い	15.4%
中学生	読書がとても好き	59.1%
	好き	48.3%
	あまり好きではない	33.6%
	嫌い	25.5%

⑤ 読書の方法

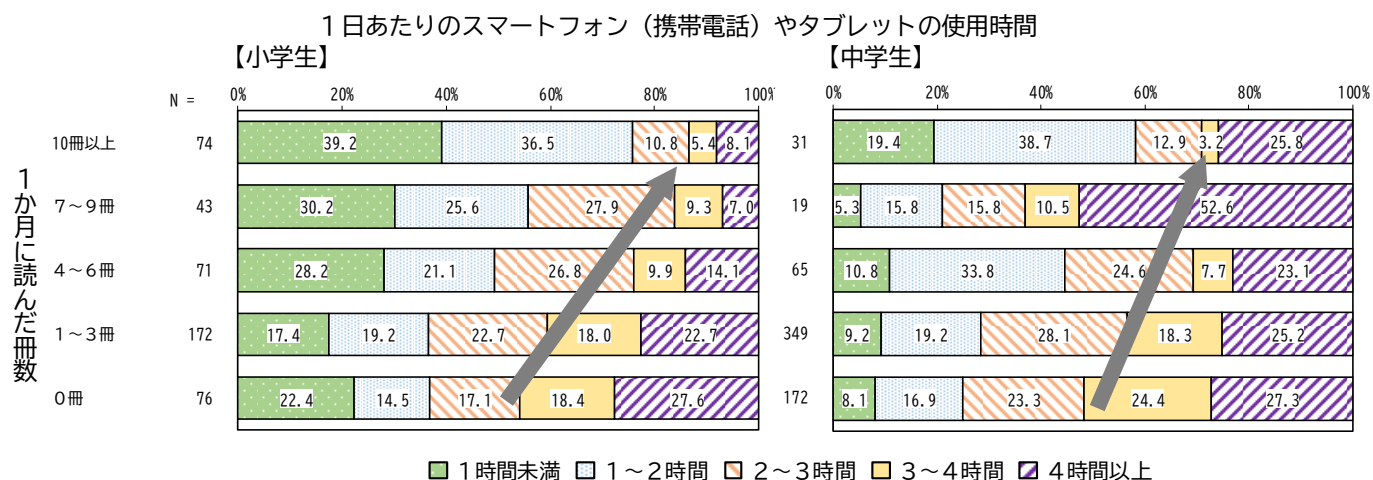
読書の方法は、「紙の本」の割合が小学生(78.4%)、中学生(70.5%)、高校生(77.4%)で最も高くなっています。



○紙媒体による読書が多いものの、電子書籍を読んでいる割合も2割を超えており、紙と電子、ハイブリッド型読書への対応が必要です。

⑥ 1日にスマートフォン（携帯電話）やタブレットを使用する時間

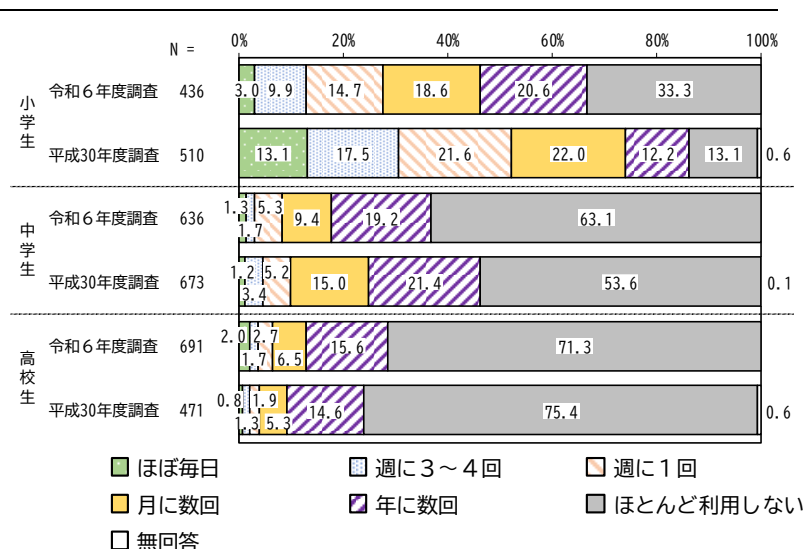
小学生、中学生では、本を読む冊数が多い人ほど、スマートフォン（携帯電話）やタブレットを使用する時間は2時間未満の人が多くなっています。



○中学生以下では、スマートフォン（携帯電話）やタブレットの使用時間が長い人は本を読んでいない傾向となっており、家庭等におけるスマートフォンやタブレットの使用状況と読書活動との関連性について考えていく必要があります。

⑦ 学校の図書室の利用状況

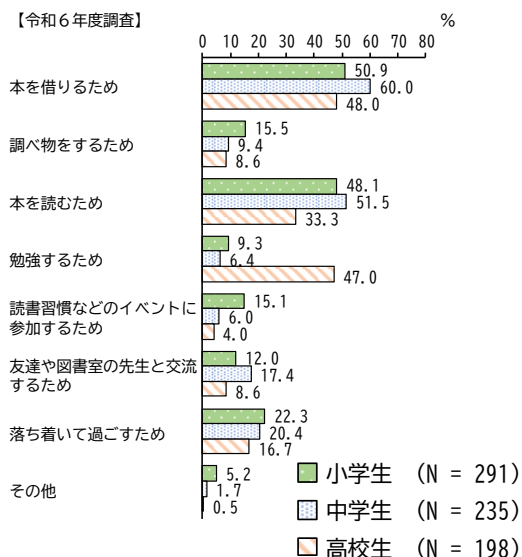
小学生では、週に1回以上利用している割合が27.6%となっており、年齢が上がるにつれその割合は減少しています。



⑧ 学校の図書室を利用する目的

小学生、中学生では、「本を借りるため」「本を読むため」の割合が高くなっています。

高校生では、「本を借りるため」の割合が最も高くなっていますが、次いで「勉強するため」となっています。



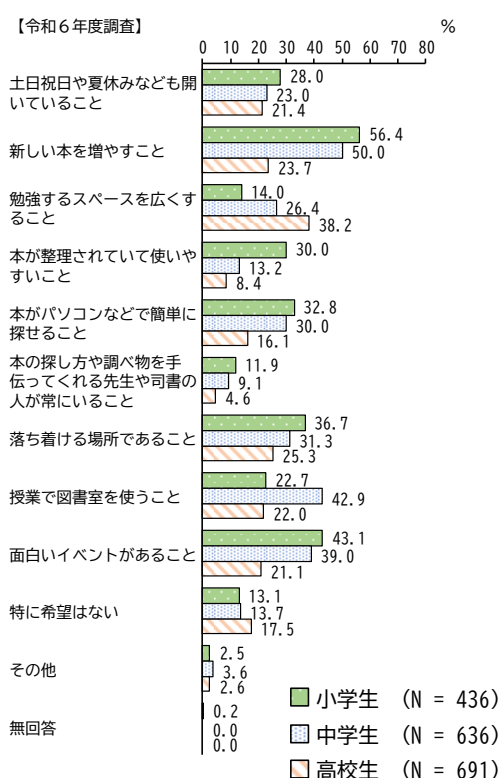
⑨ 学校の図書室をもっと多くの人に利用してもらうために必要なこと

小学生では、「新しい本を増やすこと」の割合が最も高く、次いで「面白いイベントがあること」「落ち着ける場所であること」となっています。

中学生では、「新しい本を増やすこと」の割合が最も高く、次いで「授業で図書室を使うこと」「面白いイベントがあること」となっています。平成30年度調査と比較すると、「勉強するスペースを広くすること」の割合が増加しています。

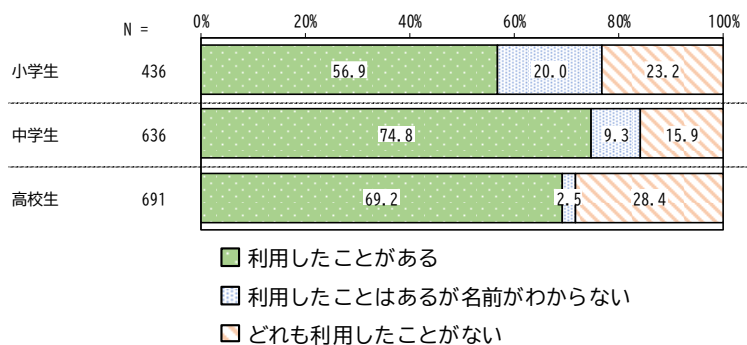
高校生では、「勉強するスペースを広くすること」の割合が最も高く、次いで「落ち着ける場所であること」「新しい本を増やすこと」の割合となっています。

○小学生、中学生は本を借りたり、読んだりする目的で学校図書館を利用している一方で、高校生は勉強する場として活用している状況がうかがえます。また、小学生では、友達や図書室の先生と交流するための割合も増加するなど、年齢層の学校図書館に対するニーズは様々です。利用を増やすためには、イベントの開催や落ち着ける場所であることなどといった意見も多く、子どもの居場所としてのニーズが高まっています。



⑩ 中央図書館（りぶら内）や市民センター図書室などの利用状況

「利用したことがある」の割合は、小学生で56.9%、中学生で74.8%、高校生で69.2%となっています。

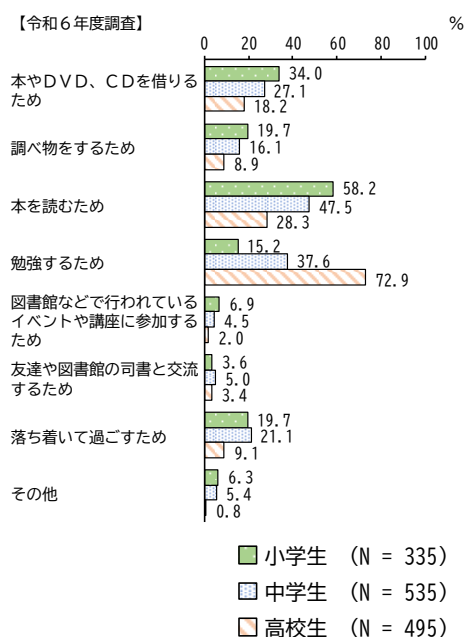


⑪ 図書館や市民センター図書室などを利用する目的

小学生、中学生では、「本を読むため」の割合が最も高くなっています。次いで、小学生では「本やDVD、CDを借りるため」、中学生では「勉強するため」となっています。

高校生では、「勉強するため」の割合が7割を超えています。

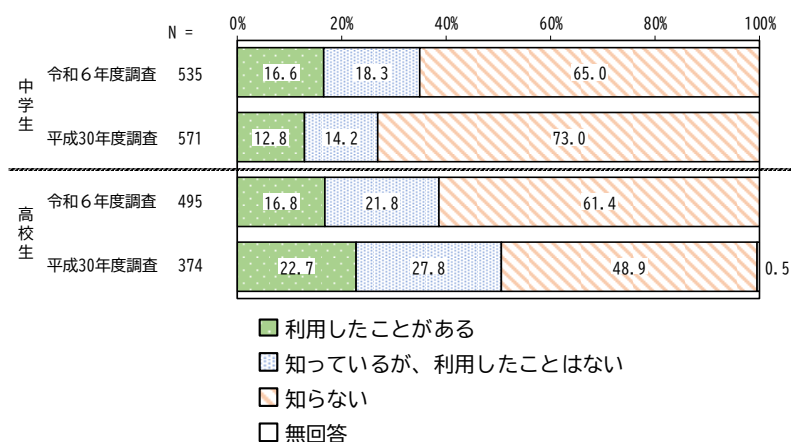
○図書館や市民センター図書室などを利用する目的は、年齢が下がるにつれ、「本を読むため」の割合が高く、年齢が上がるにつれ「勉強するため」の割合が高く、本を借りている頻度も低くなっており、年齢に応じた効果的な取組が必要です。



⑫ 中高生向けの図書を置いてあるコーナー（ティーンズコーナー）の利用状況

中学生、高校生ともに、「知らない」の割合が6割を超えています。

○中央図書館・額田図書館のティーンズコーナーを知らない割合は6割を超えており、ティーンズコーナー、ティーンズ向け図書館情報紙「図書缶」の周知が必要です。



⑬ 図書館や市民センター図書室などをもっと多くの小学生、中学生、高校生に利用してもらうために必要なこと

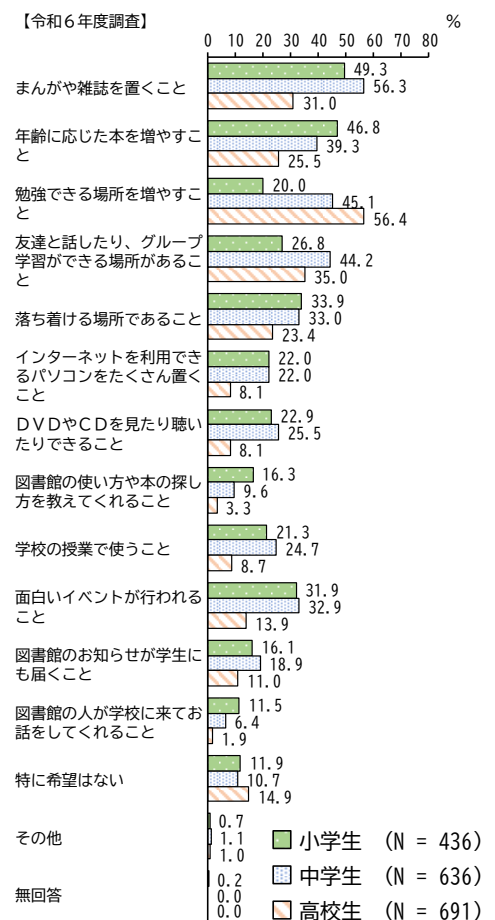
小学生では、「マンガや雑誌を置くこと」の割合が最も高く、次いで「年齢に応じた本を増やすこと」「落ち着ける場所であること」となっています。

中学生では、「マンガや雑誌を置くこと」の割合が最も高く、次いで「勉強できる場所を増やすこと」「友達と話したり、グループ学習ができる場所があること」となっています。

高校生では、「勉強できる場所を増やすこと」の割合が最も高く、次いで「友達と話したり、グループ学習ができる場所があること」「マンガや雑誌を置くこと」の割合が31.0%となっています。

○図書館や市民センター図書室をより利用してもらうために必要なこととして、全ての学年で、「マンガや雑誌を置くこと」の割合が高くなっており、子どもの読書活動推進のひとつのニーズとしてとらえ、読書へのきっかけとして蔵書を検討していく必要があります。

また、「落ち着ける場所であること」「勉強できる場所を増やすこと」「友達と話したり、グループ学習ができる場所があること」なども上位となっており、子どもの居場所としての活用が期待されています。



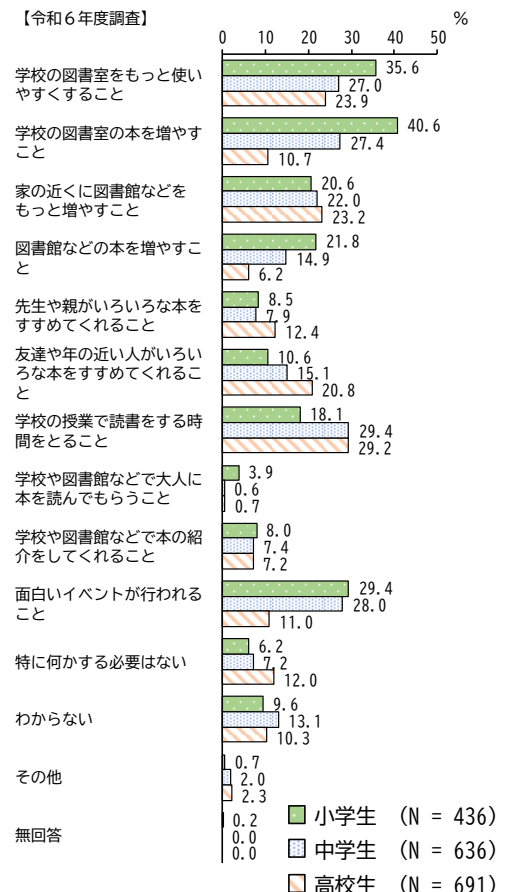
⑭ もっと読書をするために必要なこと

小学生では、「学校の図書室の本を増やすこと」の割合が最も高く、次いで「学校の図書室をもっと使いやすくすること」「面白いイベントが行われること」となっています。

中学生では、「学校の授業で読書をする時間をとること」の割合が最も高く、次いで「面白いイベントが行われること」「学校の図書室の本を増やすこと」となっています。

高校生では、「学校の授業で読書をする時間をとること」の割合が最も高く、次いで「学校の図書室をもっと使いやすくすること」「家の近くに図書館などをもっと増やすこと」となっています。

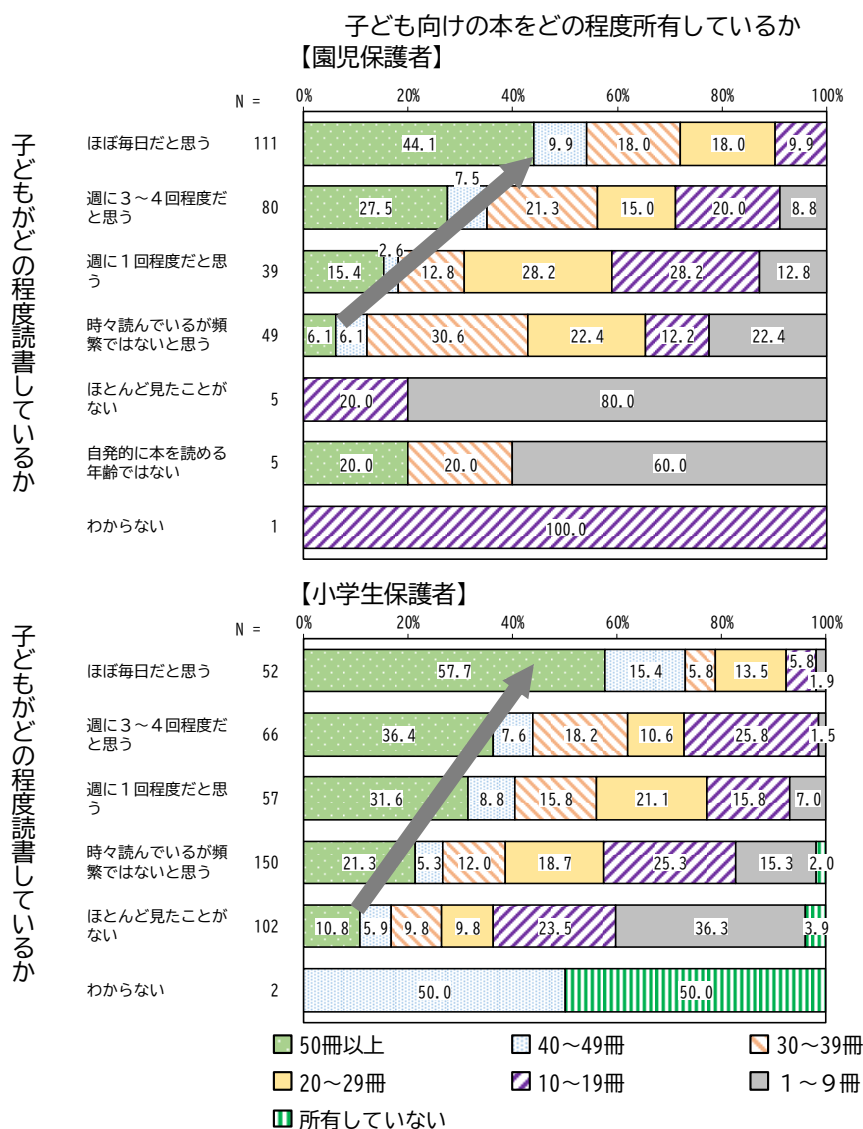
○小学生、中学生では「学校の図書室の本を増やすこと」の割合が高くなっており、蔵書の充実が求められています。また、「学校の授業で読書をする時間をとること」の割合も高く、学校と連携し、子どもの読書活動を推進する必要があります。



(2) 保護者

① 子ども向けの本の所有状況と子どもの読書の頻度

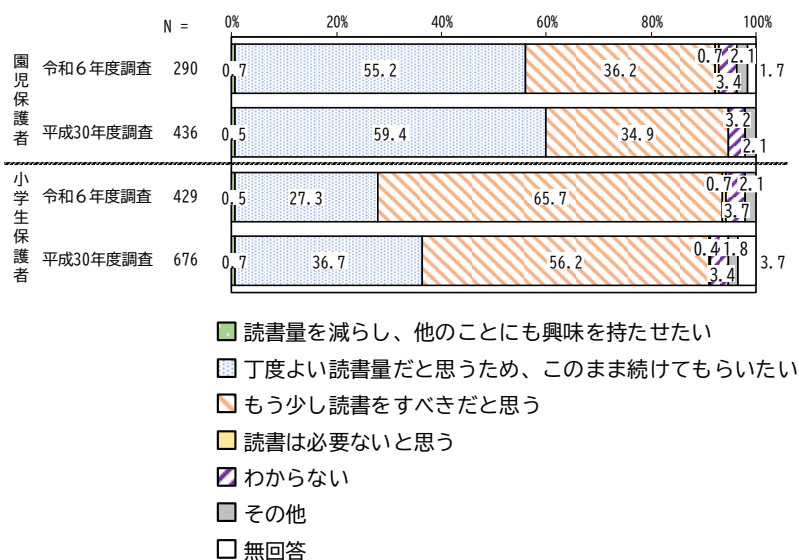
子どもがどの程度読書しているか別にみると、ほぼ毎日だと思うで「50冊以上」の割合が高くなっています。また、ほとんど見たことがないで「1～9冊」の割合が高くなっています。



○園児保護者、小学生保護者ともに、子どもが読書をほぼ毎日している家庭では、子ども向け本の所有冊数が多いという傾向が見られ、身近に本を読める環境づくりが重要です。

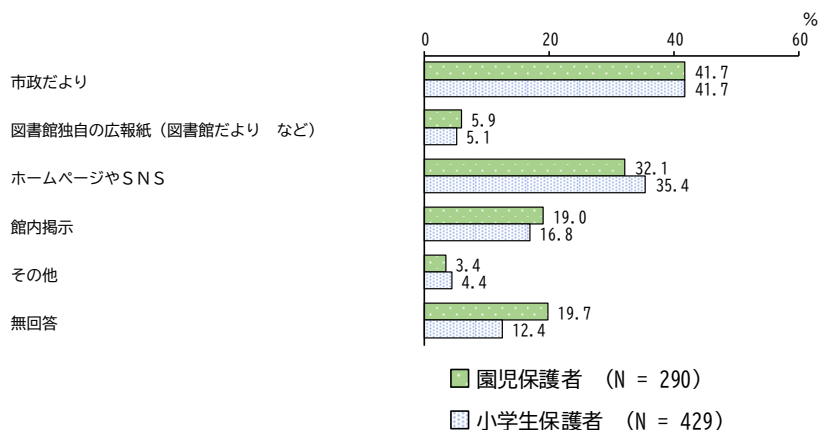
② 子どもの読書の状況についての考え

園児保護者では、「丁度よい読書量だと思うため、このまま続けてもらいたい」の割合が55.2%、小学生保護者では、「もう少し読書をすべきだと思う」の割合が65.7%と最も高くなっています。



③ 図書館に関する情報の入手方法

「市政だより」の割合が、園児保護者、小学生保護者ともに41.7%と最も高く、次いで「ホームページやSNS」「館内掲示」となっています。



○図書館に関する情報の入手方法については市政だよりだけでなく、ホームページやSNSなども高くなっており、多様な媒体での情報発信が必要です。館内掲示も一定数おり、再度来館してもらえるよう、館内掲示の内容や方法への工夫も必要です。

④ 子どもの読書活動を活発化させるために、学校等、地域、家庭で必要な取組

園児保護者では、「読み聞かせをする」の割合が74.1%と最も高く、次いで「家族みんなで読書をしたり、読書の会話をしたりする」の割合が45.2%、「保育園・幼稚園、学校の先生がおすすめの本を子どもに紹介する」の割合が33.4%となっています。

小学生保護者では、「学校の授業に読書を取り入れる」の割合が41.7%と最も高く、次いで「家族みんなで読書をしたり、読書の会話をしたりする」の割合が40.6%、「読み聞かせをする」の割合が36.4%となっています。

○読み聞かせや学校での授業に読書を取り入れるなど、子どもの年齢によって必要だと思われる取組が変わっています。また、家族で読書についての話をすることについては、園児保護者、小学生保護者でも高くなっており、園、学校と連携し読書活動を推進するとともに、家読など家庭における読書の大切さをさらに周知していく必要があります。また、「保護者が、おすすめの本を子どもに紹介する」の割合が減少しており、保護者が読書について関心を高められるよう取組を行う必要があります。

